優秀賞 一般部門

彼らはすでに

宮城県
関 千紘

体育館の壁が剥がれ落ちて割れた。ものすごい地鳴りと長い揺れ。身を寄せ合い、うずくまるしかなかった六十名を目の前に、私はただただ、声を掛け、頭を守る術はないかと数名の上に覆いかぶさった。

三月十一日の午後だった。

一週間後に卒業式を控えた六年生は、ウキウキとした笑顔と、中学校への不安が混ざり合う独特の雰囲気となる。初めての六年生担任。私も張り切っていた。思い出に残る素晴らしい式にしてあげたい。練習の指導にも熱が入る。まだ幼さの残る教え子達に残りの期間でどんなことが伝えられるだろう。教師になって五年目の私は、子ども達に「何か」を教えなくてはと思っていた。

揺れが収まるまでの数分間、「大丈夫よ、大丈夫よ」呪文の様に子ども達に言い続けた。私には、そうすることしかできなかった。

雪が舞い始めた校庭に避難してからは、点呼や状況把握、これからの避難について慌ただしい時間が過ぎた。そんな私の肩ごしに、不思議と落ち着いた声がした。「先生」振り向くと、教え子が数名立っていた。きっと怖くて、寒くて、不安で。私は勝手にそう決めつけていたのかもしれない。なぜか少し微笑んでこちらを見ている教え子が不思議に思えた。

「先生。私達に覆いかぶさって下さってありがとうございました」

「今」を噛み締めるような眼差しの子ども達を初めて見た。何よりもまずはじめに、この言葉を選んだ彼らに涙がこぼれそうになった。幼いと思っていた教え子達の強さを感じ、心が震えた。この子達はこんなにも強かったのだ。彼らは、しっかりと立っていた。

散り散りになって、ようやく迎えることができた卒業式。たくましい教え子達の門出。あの日見た眼差しは、彼らの真の強さだった。揺られながら必死で唱えた「大丈夫」という言葉。今は笑顔で言える。「この子達なら大丈夫」だと。